斉藤さんからいただいたモノ

亀　井　哲　也

斉藤さんから、パプアニューギニアの手太鼓（写真 1）をいただいた。貴重な民族誌資料や梅村学園の校史に関わるものなど、56 点の寄贈を受けるにあたり、私のゼミ所属学生と一緒に話をうかがう機会を設けた[1)]。ここでは、斉藤さんの資料への説明や人類学的物質文化研究への言及を記すとともに、斉藤さんからいただいたモノ、タンジブルなもののみならず、インタンジブルなのものについて、感謝の気持ちを込めて述べていきたい。

斉藤さんは 1980 年代から 1990 年代にかけて、パプアニューギニアでフィールドワークを実施された。「あの多分、私の年代が、ひたすら奥地を目指した探検的フィールドワークをやった一番最後の年代、だろうと思う」と斉藤さんはいう。13 歳下の私の年代では、確かにもう「奥地」を目指し、周囲から「隔絶」された社会を調査するという「神話」は崩壊していた。斉藤さんの生い立ちから今日に至るまでのライフヒストリーは、中尾世治さんと一緒にご自身で「斉藤尚文さんとの対話：ある人類学者の半生について（1）～（3）」[2)] を著されているので、詳しくはこれらを参照されたい。なお、第 4 部も今年度中には刊行され、退職前に完結する見込みとのことである。

写真 1 の手太鼓（手持ち太鼓）、全長 1,310mm、最大直径 70mm は、パプアニューギニア調査時の協力者である男性から、日本に帰国するときに記念にもらったものだそうである。以下は学生への斉藤さんの説明である。

クンドゥ。トクピジン、パプアニューギニアの共通語をトクピジンっていうんですが、それでクンドゥです。日本語だと、手太鼓って書くのかなと思います。ここに張ってあるのはトカゲの皮です。パプアニューギニアの男は必ず１つは持っていないといけないという必需品です。ニューギニアは、大きくハイランドと海岸部、島嶼部に分かれます。どの地域でも男の人はこれを１つ持っています。成人男子は。ただし、ハイランドでは、この取っ手はありません。直接持つようなタイプなんです。海岸部、島嶼部で取っ手がつくという特徴があります。クンドゥです。お祭りの時にこれを叩いて歌うというものです。

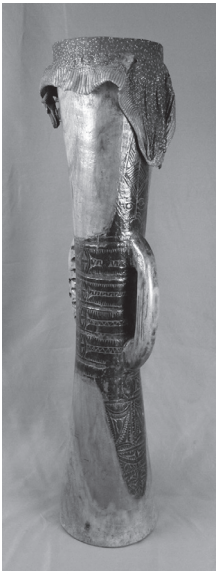

写真１　手太鼓
[C-0494][3)]

斉藤さんは「本当に物質文化に興味無いよねぇ」と、たびたびご自身を評される。私が学芸員出身で物質文化研究をしていることから、斉藤さんの「モノ」の扱いを注意（非難？）したことがあるからなのだろうが、ことさらにそうおっしゃる。しかしこの時には、手太鼓の現地名称、材質、社会的位置づけ、ジェンダーとの関わり、パプアニューギニアの３つの文化圏と手太鼓の形態との関連性、そして最後にはどう使われるものなのかという使用方法と、人類学的物質文化研究のお手本のような解説を披露してくださった。興味がないといいながらも、調査で抑えるべきところはしっかり抑えているのが、1970 年代から 1980 年代前半に人類学のトレーニングを受けた世代のもつ地力なのであろう。

物質文化研究は、かつては人類学のメインテーマであった。世界各地のモノの収集と密接に結びついた初期の物質文化研究は、博物館を舞台とし

て展開した。珍奇なものを集めて陳列する王侯貴族富裕層のブンダーカンマー（驚異の部屋）が生まれ、19 世紀の博物館の展示へとつながっている。モノが何であるかよりも、その姿かたちに魅了された時代である。この姿勢は、モノを審美的にとらえる流れとなり、民族芸術研究へと展開する。

その後、モノが制作され使用される社会の中での意味と機能と技術を探求し、その社会的コンテクストを重視する流れが生まれた。モノと人びとの暮らしのつながりに関心を抱いた時代である。さらに、構造機能主義から構造主義、象徴人類学へという人類学の潮流にそって、モノへのまなざしも変化した。モノの意味や機能よりも、シンボルとして何を表わしているのかを重視する考え方であり、モノそのものよりもその象徴する事柄に関心を寄せた時代であった。人類学における言語論的転回も大きな影響を与えた。そして 20 世紀半ば以降、物質文化研究は人類学の主流から外れていった。

ただし日本の人類学の場合、1977 年に大阪万博跡地に開館した国立民族学博物館（民博）のコレクション充実のために、かなり大規模な民族誌資料収集調査が行われた歴史がある。

> こうやってみると意外とセピック少ないね。ああ、そっか。ちゃんとした収集はしたんだけど、みんな民博に取られたんだ。まあ、取られたというか民博のお金で行ったんです。コンテナ一杯分ぐらい 4 人掛かりで 500 万ぐらい使って収集しました。その中には、例えば弓矢とかね、含まれてます。石斧も含まれてます。1990 年代だと思う。30 年。ああ、でも 80 年代終わりぐらいかな。石製品の場合は、まず国立パプアニューギニア博物館でチェックされます。貴重なので、まったく同じものが 2 つあれば、1 個寄贈して 1 個持って帰れる。でも 1 つしかないと取られる。

斉藤さんは、先輩の人類学者に声を掛けられて、こうした民博の収蔵資

料となるモノの収集にたずさわった世代になる。しかし、物質文化研究にのめり込むことはなかった。前述のとおり1980年代はすでに、人類学徒が物質文化に関心をはらう時代ではなかった。

> 貝を竹串にさしたものです（写真2）。これはニューブリテン島の東の端っこ、ラバウル近辺の人たちが使っている貝貨です。貝のお金です。死ぬとお葬式、やってもらう。で、お葬式にかかる経費というか、お葬式に来てくれた人のプレゼントとして、これをお渡しします。だから死ぬまでにこれを、何巻きも残して死ぬっていうことが、男の甲斐性ということになっています。で、これ竹串でできてるんで、こういう風に切れます。で、普通に市場で食べ物を買う時に、使えます。現金として使います。このお芋いくらというと、このぐらいっていわれたら、その分だけ切って渡す。という使われ方をしています。

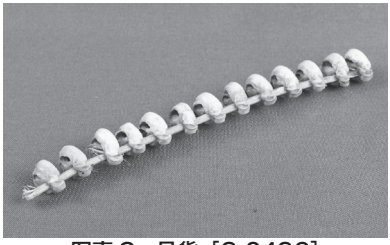

写真２　貝貨［C-0496］

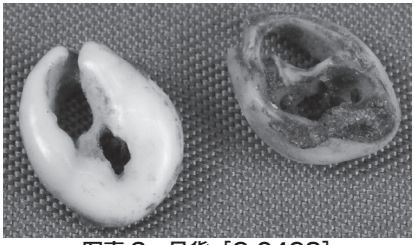

写真３　貝貨［C-0498］

人類学において、贈与、交換、交易といったモノのやり取り、人と人、社会と社会のつながりを形成し維持するシステムは、大きな関心事となっている。貝貨はその重要な媒介物である。地域限定の通貨、ローカルマネーが巷で話題になったときには、斉藤さんは「なんだニューギニアは2周遅れで先頭じゃないか」と思ったそうである。

モノが人類学でふたたび注目されるようになるのは、20世紀終盤[4]である。斉藤さんがモノに「興味がない」というのも無理はない。人類学の流行りの中で、すっぽりと物質文化研究が流行らない時期に学生時代が収

まってしまっている。時代の機微に敏感であった斉藤さんが、モノに関心を持たなかったのも当然である。

かくいう私も、学生時代から物質文化に興味をもっていたわけではなく、博物館に就職し学芸員となったからモノに関心をもつようになっただけである。その頃は（今も）社会変化に関心があり、斉藤さんの論稿[5]にも大いに学ばせていただいた。

斉藤さんは1988年4月に中京大学社会学部に着任されている。その後もパプアニューギニアの調査を続け、1993年にはJICAの仕事で1年間グアテマラに行かれている。そこでの斉藤さんのお仕事は、いわゆる「開発人類学」と呼ばれるもので、前述の中尾さんとの共著の第3部にはJICAへの協力に対する日本の人類学者のまなざしが、斉藤さんのグアテマラ行きの前と後で180度変化したことが面白く書かれている。世間の動向に先んじた研究をされた点も、時代の機微への敏感さの表れであろう。

私が斉藤さんに初めてお会いしたのは、グアテマラでの先駆的お仕事から帰国された後、1995年である。情報科学部の「文化人類学」を非常勤で担当することとなり、研究室をお訪ねして挨拶したときである。それ以来、斉藤さんの研究室でお昼をご一緒させていただくようになった。当時、生協は弁当を研究棟に届けるサービスを行っていた。そのころ私はリトルワールドで新しい展示家屋のため、南アフリカのンデベレ社会の調査を始めていたので、そういった話をしていたのだと思う。情報科学部での講義はこの年限りで、科目自体が廃止となってしまったが、1997年からは学芸員課程や文化人類学の講義を受け持つようになり、斉藤さんとの昼食が再開した。大学の様子もいろいろうかがったのだと思う。学部長や研究科長を務められていた時期にも、学期中週に一度はお会いしていたが、大学の悪い話はなかったのだろう。だからこそ私もこの大学に転職したのだと思う。

学問の先輩として、職場の先輩として、ふだんから、そして広島、台湾、北欧、南ア、タイ、イタリア、マレーシアと、一緒に博物館を巡った調査

や研修の引率で、多岐にわたってお話をする機会があったが、本稿では、斉藤さんからいただいたモノに絡め、物質文化の話を取り上げさせてもらった。最後に、改めて、中京大学社会学部、現代社会学部への斉藤さんの多大なる貢献に感謝の意を表したい。ありがとうございました。

注記

1）機会は2回、いずれも豊田キャンパス16号館1階の博物館実習室にて、亀井ゼミ3年生13名が参加した。1回目は2021年10月6日、斉藤さんが資料を手に取りながら説明してくださったものを学生たちが記録した。2回目は10月20日、前回の説明をもとに学生たちが文献を調べ、不明な点を斉藤さんに確認した。

2）中尾世治、斉藤尚文 2018「斉藤尚文さんとの対話：ある人類学者の半生について（1）〈特集 ロングインタビュー〉」『南山考人』46, 49-89、同著 2019「斉藤尚文さんとの対話：ある人類学者の半生について（2）〈特集 ロングインタビュー〉」『南山考人』47, 35-56、同著 2021「斉藤尚文さんとの対話：ある人類学者の半生について（3）〈特集 ロングインタビュー〉」『南山考人』49, 21-49。

3）キャプションの末尾にある角括弧内の記号番号は、資料番号である。「C-0494」は、現代社会学部が収蔵管理する494番目の民族誌資料、という意味である。なお記号「C」は現代社会学部学生の学籍番号の頭文字に由来する。

4）20世紀終盤から近年にかけて、モノへの注目が再び高まった。アパデュライのモノにも社会生活があるという指摘、ミラーによるマテリアリティ研究、ジェルによるエージェンシー論、そしてギブソンによるアフォーダンス理論などが、人類学の調査研究に大きな影響をおよぼしている。近年の物質文化研究は人類学の主流とはいわないが、それなりの存在感をもつまでに復権しているといえるだろう。

5）斉藤尚文 1989「歴史と文化変化」合田濤（編）『現代社会人類学』弘文堂。